



穏やかに夢を語る馬場淳さん。中学校の旧給食センターを活用した加工場で。

馬場家の歴史を三世代前まで遡る。六代目の誠悦（せいえつ）さんは、いつも微笑んでいる、えびす様のような人だった。乳牛を飼い、穀物を販売するうちに商売の面白さに惹きつけられていった。結婚して10年ほどが経つた1970（昭和45）年、健吉（けんきち）さんは、いつも微笑んでいる、えびす

山際の集落に多かつた「三浦」という名前に由来している。故郷への思いが込められているのかもしれない。今から4年前、淳さんはこの蔵から一冊のノートを発見した。虫食いだらけのノートの表紙には筆で「農家日誌」と書かれており、脇に鉛筆で小さく「馬場三右工門（さんにもん）」とある。「三右工門」とは馬場家の屋号である。戸籍には残っていない九代以上前の先祖の名前だが、「三右工門の孫です」と言えば町じゅうの人わかる。戸籍は口伝で継承されてきたため、淳さんがノートを見つけるまでは誰もどんな字を書くのかわからなかった。淳さんは「自慢のホワイトアスパラガスの袋にも『三右工門』という字が堂々とプリントされている。

馬場家三代史

田んぼでコメを作り、畑ではヒエを育てていた。浄法寺町を含む北岩手地域では、やませが厳しく夏場の気温が低い。そのため十分にコメが育たず、ヒエをはじめとした雑穀を食べて飢えをしのいでいた。大きくなつた田んぼの一隅にタネをばらまいて育てるという非常にシンプルな方法で、江戸時代からさほど進歩していないかった。誠悦さんは苗を温めれば早く育つという情報を仕入れ、苗に油紙を掛けて育てた。「そんなのやらなくたって」と周囲にはいぶかしかられたが、効果は歴然だった。訪ねてくる人は惜しまずその技術を伝え、数年後には町じゅうにすつかり普及した。

七代目・健吉（けんきち）さんは町場から八千代さんを嫁にもらつた。八千代さんの実家は御売業を営んでおり、健吉さんはその手伝いをするうちに商売の面白さに惹きつけられていった。結婚して10年ほどが経つた1970（昭和45）年、健



1.田畠は一面の雪原に。祖母の八千代さんが畠に向かう。2.馬場家の蔵。3.マル三青果のトラックに乗った2歳ごろの淳さんと父・弘行さん。



三右工門

馬場淳（まこと）さん（31）は馬場家の九代目当主である、と「言われている」。実際は九代以上続く家だが、戸籍を管理していた寺が焼失したため九代以上前の情報が辿れないのだ。その昔、馬場家はここからもと離れた山際の集落で暮らしていた。しかし、流行り病で家の大人たちが全員亡くなり、子どもたちだけでは生きていけないだろうと、川の近くにあった本家に呼び寄せられた。時代は過ぎ、馬場家はここに家と蔵を建て、③の紋を掲げた。それは元来、屋敷を構えていた

年未から降り続く雪がすっぽりと町を覆っている。家々の屋根から長いつららが何本も伸び、杉の葉は一枚一枚、ぬかりなく雪が振りかけられている。まるで丸ごと凍ってしまったかのような景色の中を、流れの川だけが動いている。川のほど近くに、③という立派な紋のついた、馬場家の蔵がある。